

群 教 セ	F09 - 01
	平16.224集

# 教育相談機能の充実を目指した 学校風土づくり

特別研修員 野尻 努 (前橋市立大胡中学校)

## 《研究の概要》

不登校や相談室登校などの課題を解決に導くためには、職員間のよりよい連携が必要であると考えた。風通しのよい学校風土ができあがることで、学校のニーズにあった教育相談体制が自然発生的にできあがり、実際の機能として定着していくと考える。「ほっとルーム」を教育相談機能全般と捉え、相談室の改善(ハード)と職員研修会の実施(ソフト)を軸としてニーズにあった支援体制の構築を研究する。

【キーワード：教育相談 教職員研修 ほっとルーム 連携 学校風土】

## 主題設定の理由

本校では、5年前から心の教育相談員が配置され、現在も嘱託職員として週4日相談室担当として勤務している。また、今年度よりスクールカウンセラーが配置された。非常に恵まれた環境である。しかし、この恵まれた環境は、一方で教育相談に関わるニーズが高いととらえることができる。

実際に、相談室登校、もしくは保健室登校をする生徒が複数見られ、多い年には10名近くになることもあった。不登校、相談室登校というものは特別なものでなく、誰にでもいつでも起こっておかしくないものであると言える。

現在の本校の教育相談に関わる体制を考えたときに、職員の聞き取り調査から以下のことが課題としてとらえられた。

不登校等の問題を抱える生徒に対して、学年会などで情報交換は行われているが、具体的な対応策が話し合われることがなく、個人が抱え込んでしまう傾向が強い。

教育相談部会や生徒指導委員会でなされた意見交換が、学年や担任などにうまく伝わらない。

情報を共有する場はあるが、全職員の課題としてとらえられていない。また、共通の課題としてとらえても、どのような形で関わりを持つべきなのかがわからない。

教育相談の組織、人員は充実しているが、考え方や機能についての共通理解が少なく、効率的でない。

教育相談機能(ほっとルーム)に対する認識が全体として薄い。

こういった課題を解決するためには、すべての生徒が抱える問題が全職員の共通の課題であり、全職員が関わりを持っていくべきものであるという風土づくりが必要であると考えた。

そこで、「ほっとルーム」をスペースではなく、「教育相談全般に関わる機能」と捉え、全職員が課題意識を持ち、共通理解を図ることを通して、学校全体を「ほっとルーム」にしようと考え、本主題を設定した。

## 研究の問い

学校全体を「ほっとルーム」とすることを目標として、教育相談機能への関心を高め、職員

間の連携を充実させるにはどのような職員研修が有効であろうか。

## 研究の見通し

### 1 教育相談研修について

具体的な聞き取り調査をもとに職員のニーズをとらえ、スクールカウンセラーとの相談をもとに、今役立ち、利用できるものを提供したいと考える。具体的には3回の研修会を予定しており、それぞれのテーマを「共通理解」「体験・経験」「構築」と設定し、発展的に進めようと考えた。研修会後の「振り返りシート」をもとに、次回の研修会の具体的内容を検討することにより、職員のニーズに応えられるものを設定できると考える。また、それぞれの研修会で取り上げた内容を各個人、学年等で活用・応用・拡充できるように配慮をすることで身に付く研修となると考えた。

### 2 相談室の物理的・機能的な改善について

スクールカウンセラーとの相談スペースとして別室を設け、スクールカウンセラー便りなどを通してPR活動を行うことで、開かれた空間としての相談室が機能すると考える。

スクールカウンセラーの配置に伴い、これまで以上に専門的な相談機能の充実が望まれる。反面、誰でも、いつでも、どんなことでも気軽に話せる空間として機能させたいとも考える。環境的な整備などを進めることで、この両方を満たす空間となると考えた。

一方で、これまでの教育相談室では、学習材料の充実、粘土や心を落ち着かせる玩具の導入をすることで、心の疲れた生徒の憩いの場、自分について考える場、自分なりの学習を進める場としての機能の充実につながると考えている。

### 3 全体を通して

以上のような見通しを持って、研究を進めることとするが、いかにソフト面とハード面を整備しても、それらが使いこなされなければ機能したとは言えない。そこで、実際に生きて動いていくためのもっとも大切なこととして「つながり」を考えた。(図1)



図1 「つながり」を円環的にとらえた構想図

職員研修会では、ニーズをとらえ、実践し、具体的な振り返りから検証、見直しをして次回に活かす。相談室の経営に関しては、関わりのある教職員の意見交換を通して検証、見直しを継続する。もちろん研修会での話し合いが具体的な相談室の改善につながる、相談室のできごとに研修での実践が活かされる、といった横の「つながり」も見えてくるはずである。

人と人との小さな「つながり」が課題の共有になり、解決への協力になるという自然な流れができあがるのが校内の「支援体制」になり、職員の本当の連携につながると考える。

## 研究の内容

### 1 教育相談室の充実に向けて

#### (1) Plan (計画)

スクールカウンセラーの配置に伴い、内部（生徒、教職員）外部（保護者、外部機関）両方との相談を想定した場の設定が相談された。

落ち着いて話せる空間であること。

プライバシーが守られる空間であること。

外部からも訪問しやすい位置であること。

これまでの相談室来室生徒（相談室登校、休み時間の利用も含む）にとっても利用しやすい位置であること。

養護教諭などの、相談室との関わりの深い教職員から近い位置であること。

などの条件からこれまでの相談室のはず向かいであり、また保健室からも近い現在の位置が設定された。環境整備については、スクールカウンセラーとの相談で進めていくこととした。

これまでの相談室に関しては、心の教育相談員の考えを中心に、癒し空間としての玩具などの整備、学習空間としての教材の充実を進めることとした。

#### (2) Do (実践)

これまでの教育相談室スペースからスクールカウンセラーとの相談スペースを別室に設けた。(写真1)(写真2)独立したスペースを設けることで、落ち着いてじっくりと相談できる環境が整った。保護者を含め、相談に訪れる場面が見られるようになった。また、従来の教



図2 第1相談室(学習スペースの充実)



図3 第2相談室(相談スペース)

育相談室のすぐ近くにあるため、相談室登校の生徒との面談にも活用されている。

相談ボックスの設置を行った。秘密の厳守がなされることを目的として選んだものを壁に埋め込む形で設置した。管理者はスクールカウンセラーとし、窓口を一つにして、情報が漏れる

このないよう考えた。また、スクールカウンセラーを情報の中心とし、必要に応じて担任、関係職員へ情報が流れるような道筋を作った。

生徒向けのスクールカウンセラー便りを発行している。(資料1)日常生活でおこりがちな

友だちとのトラブルなどを取り上げた内容を盛りこんだり、具体的な相談室の活用方法を掲載することで、相談しやすい雰囲気伝わったように思われる。

また、生徒向けのものを職員にも共通に配布することで、教育相談に関わる関心を高めることができたように思われる。

### (3) Check (検証)

スクールカウンセラー専用の部屋を設けたことにより、実際の相談機能が充実してきていることは感じとれる。たとえば、心のつかえを自分から相談に行く生徒、教師の促しに違和感なくすんなりと相談に行く生徒、自らの子どもの心配事を定期的に相談にくる保護者、生徒との

対応に悩み相談に行く教師、などの姿が見られるようになった。スクールカウンセラーの存在自体が心の支えになっている様子も感じ取れる。これまでの教育相談室も相談室登校の生徒たちの心のよりどころとなっている。

一方で、専門的な相談がなされることや場所の住み分けが行われたことで情報量が増え、内容も多岐にわたることから、意見の交換、情報の共有の方法が難しくなっている。

### (4) Action (見直し)

スクールカウンセラーの配置が今年度からということもあり、教職員は手探りのスタートとなり、スクールカウンセラーに頼る部分が大きかった。また、これまでは、生徒指導会議・教育相談会議においても、情報交換はなされたが、課題を広く共有したり、改善策を検討するようなどころまでは進められていなかった。ハードの充実により、情報量が多くなったことで時間的にも組織的にも広がりが望まれ、効率化が必要とされる。場や人の設定にとらわれず、必要なときに必要な人が必要に応じて声を掛け合える雰囲気作りを進めることが見た目のしくみ以上に大切である。また、情報交換の量が増えることで、教職員たちの意見のぶつかり合いがでてきた。職員研修などで意見を交換する場を設定し、個々の持ち味を引き出す話し合いをコーディネートしていくことが大切である。

## 2 職員間のよりよい連携を目指して

二つの「共通理解」を目的として教育相談に関わる職員研修を行う。一つは、本校の教育相談の考え方の共通理解。もう一つは、教育相談に関わる技法の共通理解である。この二つの柱を共有し合うことで、情報がスムーズに流れる人間関係に近づくと考えた。「個人が課題を抱え込まない、すなわち共通の課題として全体が認識し合う。」という目的のもとに職員研修会を設定した。

### (1) 第1回研修会から

#### ア Plan (計画)

「共通の課題と認識する 全体で取り組む」ということを気づきの目的として第1回研修会を設定した。当初は、講義形式での研修会を考えていたが、スクールカウンセラーの「実際に

### 資料1 スクールカウンセラー便り



体験することから学ぶべきだ」というアドバイスにより、事例検討会を実施することとした。年度当初より校内研修の一つの柱として心の教育を取り上げ、年間の計画にも位置づけていたので、全体への投げかけも問題なく行えた。研修企画委員と流れの検討、事例の提供等の相談を行い、実施内容を決定した。企画委員、スクールカウンセラーのアドバイスから、「具体的な方法を体験して共通理解を図る」から「個々が自分の持ち味で貢献する」というところまで関心を高めたいと考えた。

イ D o (実践)

第1回 参加者34名	研修のテーマ 教育相談についての共通理解	研修実施日 平成16年 9月13日(月)
<p>研修会のねらい 個を対象とした事例検討会から教育相談的な考え方やチーム支援などの具体的な方法に対しての情報提供を行い、教育相談に関わる職員間の共通理解を図る。</p>		
<p>研修会の内容</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 本日の予定説明(研修主任)</li> <li>2 事例検討会の進め方(S C)</li> <li>3 事例1に対する検討(1学年職員より提案)</li> <li>4 事例2に対する検討(2学年職員より提案)</li> <li>5 スクールカウンセラーからのアドバイス</li> </ol>		
<p>振り返りシート内容(抜粋)</p> <p>【参考になったこと】 具体的な事例に対する対応、支援法。 家庭との連携の大切さに気付いた。 たくさんの人たちの考えを持ち寄りながら、解決に導いていくことが大切だと実感した。 家庭環境が複雑になり、学校の関わりが難しいと感じた。</p> <p>【もっと知りたかったこと】 問題の理解や課題把握のための具体的手法を指導していただければ、今後実践できたように思う。 問題行動のある生徒がいたときのクラスの他の生徒への働きかけ。 クラスでのいじめなどの問題行動についての指導体制について。(担任はどこまで、学年はどこまで?)</p> <p>【今後取り上げてほしいこと】 より具体的な手法など。 エンカウンターの実技を取り入れたもの。 エンカウンターなどのさまざまな技法について。 学級、委員会、クラス、部活などの集団を取り扱ったもの。</p> <p>【感想】 生徒のことをじっくり話し合ったりすることの必要性を再認識できた。 個々で抱えている問題を、広い人間関係の中で話題にする機会を増やすべきだと感じた。 学校として、方針を決め、対策を立て、動いていくことが大切。 生徒に対して、一人でなくたくさんの人が共通理解のもとに関わっていくことが大切だと改めて感じた。</p>		

ウ C h e c k (検証)

事例検討の方法を大まかにつかむことができ、チーム援助へのつながりも確認できた。事例検討などを通して意見の交換をし、課題を共有することの大切さが実感できた。

第3学年でチーム援助会議が開かれた。それぞれの立場での有効な意見交換がなされたが、今後の予定を詰めずに終わってしまったので、流れがとぎれてしまう結果となった。また、他学年でも複数の教員が関わっていく様子うかがえた。

振り返りシートからたくさんの先生方がそれぞれ自分で課題を抱え込んでいる様子と打開する方法を模索していることが感じ取れた。課題をまず共有し、色々な見方で分析し、対応していくことが課題の解決につながっていくことが認識されたように感じる。感じたことをつなげていく研修が次回に望まれる。

エ Action (見直し)

スクールカウンセラーの日常の相談活動と今回の研修も一つのきっかけとなって、各学年や各個人、色々な関わりを持つ先生方とで自然発生的なチーム援助体制が試されたようだ。考えていたよりも先生方の動き、反応が早く、準備を超えていた。先の見通しを持って、次回の研修へのつながり、なにより今回から次回までの時間、今後継続される指導を想定しての準備が必要である。援助会議用シートの用意や説明なども十分に行っておくことができれば、研修が日常につながるようになると思う。

(2) 第2回研修会から

ア Plan (計画)

第1回目の研修会の振り返りシートから「集団を対象とした予防的・開発的なエクササイズ」の要求が高いことがわかった。3回の研修会を「共通理解 体験・経験 構築」と捉えていたことと一致する部分があるように思われた。また、第2回研修会の時期は学校行事の充実するときであり、クラスという集団での関わりを大切にしながらエクササイズを実践に移せるタイミングでもあったと考えた。

そこで、ショートエクササイズを中心に実習し、その効果を実体験していただき、学級活動でのウォームアップとして活用することを目的の一つとした。

イ Do (実践)

第2回 参加者32名	研修のテーマ 具体的手法の体験と実践	研修実施日 平成16年10月 4日(月)
研修会のねらい 第1回研修会の振り返りシートの内容を受け、集団を対象とした具体的なエクササイズを体験する。具体的な体験の中から子どもの目線を直に感じる機会とする。		
研修会の内容 1 本日の予定説明(研修主任) 2 ウォームアップ(SC) はてしなくジャンケン 3 ショートエクササイズ実習(SC) 人間知恵の輪 拒否と受容のロールプレイ 4 ロングエクササイズ(SC) 共同絵画 5 スクールカウンセラーからのアドバイス		
振り返りシート内容(抜粋) <b>【参考になったこと】</b> 毎日の生徒への対応を反省させられた。		



生徒の目線でいろいろな活動を体験できてとても良かった。  
生徒や保護者に対しての応じ方、接し方に気をつけて人間関係づくりができると思う。

クラスですぐに実践できそうなものをたくさん教えていただき、勉強になった。

仲間づくり、友だちづくりをする上で必要な資質を伸ばす手だてとして有効な手法だと思った。子どもたちへの支援の方法として実践してみたい。

【もっと知りたかったこと】

クラスや部活などで子どもたちとの関係づくりに悩んでいる。先生と生徒たちのよりよい関係を作るにはどうしたらよいか知りたい。

生徒の心の状態を知ることができるアクティビティ。

【教育相談研修で取り上げてほしいこと】

相談室登校、または教室へ行きたがらない生徒への対応。

いじめや不登校などに対する具体的な解決策について。

子どもたちとの人間関係づくりの方法について経験を交えているいろいろな人の話を聞きたい。

第1回のような事例検討会

不登校生徒、保健室登校の生徒に対する対応の仕方。

【感想】

具体的で現場に即した研修になっていると思う。

すぐに教室で使えそうなので、これからもこのような研修（1回、2回）を続けてほしい。

楽しみながら体験ができた。体験することの大切さが実感できた。

教育相談が一番悩むことなので、勉強になった。

実際に使えるものだったので良かった。

ウ Check（検証）

体験・経験の大切さに気付いてもらえた。方法を知ること個人で個人の技量に広がりが見られた。そういう意味でも現場に生きる研修であった。

参加者が、1回目の研修に比べて多少減っていた。教職員のニーズを確実に把握していかないと目指すところに到達できない。

エ Action（見直し）

振り返りシートは実践の直後に書いていただいたので生の声が聞けたように思う。反面、このシートに頼りすぎてしまうことの難しさを感じた。実際の職員のニーズはどこにあるのかを探るにはやはり書き込むことも大切であるが、研修会の一部としてシェアリングを行う時間を持つべきである。時間的な制限などもあるが、枠にとらわれない会話の中の方が本音が聞こえてくるように思う。特に、具体的に体験してもらった研修の形をとる今回の場合には有効である。


(3) 第3回研修会から

ア Plan（計画）

第3回の中心となる目的は「構築」である。今まで以上に風通しの良い環境作りをイメージさせたいと考えた。連携は強制することで動くものではない。また、型にはまったものでは工夫がなくなる。そこで、実際に相談室登校をしている生徒を事例として取り上げ、検討会を行う中で、二つの目標を設定して研修会を行うこととした。一つ目は、事例生徒と直接関わる教職員（担任、相談員、養護教諭、生徒指導主事、学年教育相談担当など）の、相談室を中心とする支援体制をイメージ（構築）すること。二つ目には、二度目の事例検討会の中で、各学年のこれまでの取組を参考として提案してもらったことで、チーム支援の形をイメージ（構築）す

ることである。

### イ Do (実践)

第3回 参加者27名	研修のテーマ よりよい連携の構築	研修実施日 平成16年11月15日(月)
<p>研修会のねらい 相談室登校の生徒を事例として取り上げ、意見交換を通して教員それぞれの関わりを探ることから、よりよい連携体制を考える。</p>		
<p>研修会の内容</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 本日の予定説明(研修主任)</li><li>2 事例に対する検討(3学年職員より提案)</li><li>3 スクールカウンセラーからのアドバイス</li></ol>		
<p>振り返りシート内容(抜粋)</p> <p>担任一人だと発見できない生徒の良さをいろんな立場の先生から伝えてもらえることの大切さを実感した。</p> <p>共通理解の場をもっと設定すべきであると感じた。</p> <p>情報交換の場とするだけでなく支援の手だてまで進めていきたい。</p> <p>学校に期待される部分が多い時代にどのように生徒に場を確保し、ケアしていくのが非常に難しいと感じた。</p> <p>担任や担当の職員への負担が増えないようにしたいと思うが、協力していくことの難しさも実感した。</p> <p>三回の研修はそれぞれ有意義であった。</p> <p>困ったことがあった場合には教師同士で話したり、声を掛け合うことが大切だと思った。</p> <p>こうすればというマニュアルのないところが教育相談の難しいところであると感じた。</p> <p>生徒の心を理解しようとするが、なかなか理解し合うことが難しい。生徒同士となるとより難しい。</p> <p>3回の研修を通して、いろいろな子どもがいること、いろいろな面から子どもを見ていかなければならないことを学んだ。</p> <p>一つの問題でも、様々な人がいろいろな面から見て話し合うことが大切だと実感した。</p> <p>みんなで生徒を見守る、支えるということを常に頭において、教員生活を送ってきたい。</p>		

### ウ Check (検証)

「みんなで」という言葉が見られた。理解していることではあると思うが、実際の言葉となって意識されることが大切である。また、負担の共有をすべきという言葉からは「課題の共有」がイメージされる。この観点が共通理解につながると考える。人と人のつながりが見えてきたことから「構築」へ発展する研修を継続したい。

また、一つの事例として相談室との関わりを見ることでこれまでの研修と相談室の経営とが小さな接点を持ったように思う。少なくとも、これまで以上の教職員が相談室に関心を持ってくれたことが収穫である。

### エ Action (見直し)



今年度は2学期の3ヶ月間に3回の研修会を行ったが、時期的にはもう少し早いほうがよいと感じた。それぞれの教員が課題を抱え込んでしまう前にニーズをつかみ動いていけば、子どもたちの抱える課題へのアプローチも迅速に、的確に行われていたに違いない。相談室と教職員の連携も進んでいたはずである。年間を通しての見直しをはっきり持ち、計画的に来年度以降も進めていけると良いと思う。もちろん今回をベースにしてより発展的な研修が望ましいが、その場その場のニーズをうまくつかむことが大切であると思う。そのためには、やはり情報を気軽に交換できる雰囲気が必要である。今できつつある体制を活かした研修を進めることが「風土づくり」につながると考える。

### 研究を通しての気づきと学び

#### 1 コミュニケーションは「つながり」作り

3回の研修会を「共通理解」「体験・経験」「構築」というテーマに沿って行った。すべてをトータルして「色々な方法、様々な場面のコミュニケーション体験の実践」とまとめることができる。二度の事例検討会からお互いが分かり合い、課題を共有すること、エクササイズ実習を通しては手法を学ぶことから、関わりを持つ自信が身に付いたように思う。これらが教職員間のつながりに発展している。それぞれの教職員の持っている力が持ち味として発揮される「つながり」ができつつある。紙上の組織から派生する分業ではなく、個々の力が結集して具体的に機能する協働である。(図4)

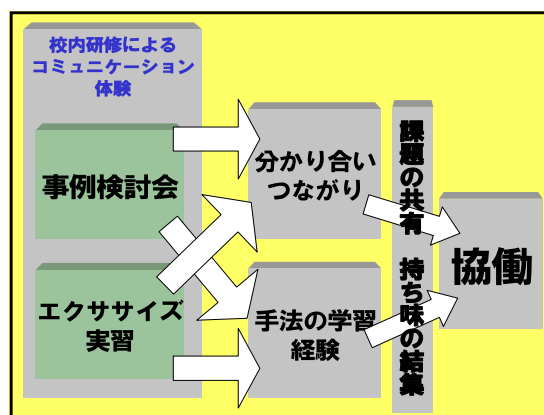


図4 研修会が協働につながるイメージ図

#### 2 「つながり」が生む実践

具体的には、形式問わず、職員室での普段着の会話の中で、子どもたちの情報交換がなされる場面が増えている。会話の中で中心となる存在ができ、複数の人間が動くというチーム支援体制も改めて場を設定することなく機能しはじめている。また、スクールカウンセラーの積極的な働きかけがあり、情報の交流と相談が頻繁に行われている。実際になかなか心を開いてくれない不登校生徒の家庭に学年主任や副担任が家庭訪問を行うことなどが行われた。

大変単純なことだが、教員はだれもが、子どもに対しても、教員相互においてもより良い関わりを持ちたいと考えている。しかし、きっかけと自信がないことにはなかなか一歩を踏み出せないのは事実である。3回の研修において行われたことはこのニーズを捉えたものであった。

#### 3 体験、実践が自然な協働体制へ

自然な協働体制は機能する組織に発展していく。情報の共有が課題の共有になり、情報の交差点となる人が学年コーディネーターの役割を果たす。すなわち、コミュニケーションの充実が組織の変容につながる。こういった風土は、自然な形で情報の転換にもつながる。これまで、課題に対して「大変だね」という返事だった会話が、「どうしましょう」という会話に発展するようになった。これも、教員相互のつながりが課題を共有することで深まった成果であると考えられる。

一方で、自然な協働体制は個人への負担につながりかねないという課題も見つかった。各個

人の持ち味をコーディネートすること、情報を整理するという作業は大変な仕事量である。雰囲気としてできあがってきた今の体制を、改めて組織化していくことが負担の軽減になり、より強力な連携につながると感じた。

#### 4 ニーズをつかんで体験的な教育相談研修を

具体的な研修では、明確な目的を提案した上で実践に移らないとねらいがぼけてしまうことが分かった。しかし、実際は目的を直接には表現しにくい部分もあるので「無意識の強制」が必要だと感じた。生の声で的確にニーズをつかみ、そこに応えるものを設定すれば、集団が関わりを持ち、そして変わってくる。ニーズに対する内容はできる限り具体的な事例を取り上げ、全体で活動すると良い。経験が連帯を生むように思う。今回の研修においては、夏休み中に実際のクラスの様子などを構えずに話す時間を持った。その中で、それぞれの教員が「うまく情報が伝わらないこと」や「具体的に協力する方法が分からない」という感覚を持ち、これが課題を個人で抱え込んでしまう原因の一つになっていることがつかめた。そこで、情報をつなげることと具体的な手法を体験する研修を設定した。このニーズに対して、事例検討会とエクササイズ実習は大変有効なものであった。

#### 5 「人と人との関わり」が風土作り

「ほっとルーム」を教育相談機能にとらえ、その支援体制やシステムの構築の研究を進めたが、やはり最大のポイントは「人と人との関わり」であると感じた。学校にある具体的な課題を共有し、実際の経験や体験を通して学び、そして共通のゴールに向かって実践してみることから、機能するしくみができあがることを学んだ。これが、学校風土の創造であり、システム構築の第一歩である。話し合い、関わり合い、実践し合う研修が、このような効果につながることを学んだ。

そして、行った内容もさることながら、計画 実践 検証 見直しというサイクルを念頭において研修を進めることで研修自体も「つながり」ができ、根付く研修となると考える。

#### 参考文献

- ・佐藤 勝男他 編 『育てるカウンセリングによる教室課題対応全書11 困難を乗り越える学校』 図書文化（2003）
- ・蔭山 昌弘 著 『現場教師のための学校カウンセリング入門』 黎明書房（1997）
- ・滝 充 編著 『ピア・サポートではじめる学校作り中学校編』 金子書房（2001）
- ・石隈 利紀他 編 『スクールカウンセリング事典』 東京書籍（1997）
- ・伊川 義安 著 『子どもを立ち直らせるスクールカウンセリング 気になる子どもへの対応』 黎明書房（1997）
- ・群馬県総合教育センター 『不登校問題課題解決支援資料』（2004）